

---

# 恋うた

城市佳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋うた

### 【Nコード】

N5275D

### 【作者名】

城市佳

### 【あらすじ】

福祉系の大学生である「僕」は、学生ボランティアの愛ちゃんに慕われている。10歳児ぐらいの知能しかない愛ちゃんを僕は妹のようにしか思っていない・・・はずだ。でも愛ちゃんは僕に特別な感情を抱いているようだ。

「ひまわり作業所」で働く愛ちゃんは、長い髪を毎日きちゃんと二つに結んで、蝶とか花とかの可愛い髪留めをつけている。養護学校の高等部を卒業してから親元を離れ、グループホームで暮らし始めて、そろそろ一年が経つらしい。この夏が終わったら20歳になるのだという。作業所では朝早くからパンを焼き、昼間は作業所に隣接している喫茶「ひまわり」でウェイトレスをやっている。無邪気な笑顔が可愛い女の子だ。

福祉系の大学生である僕は、

学生ボランティアとして作業所に通っていた。

作業所で働く人たちは、僕たちボランティアを気持ちよく歓迎してくれる。

それは愛ちゃんも同じだった。

作業所にも、グループホームにも同世代の友達はいないようだったから、

僕たちと接するのが、楽しいのだろう。

愛ちゃんと同じ年の僕は、

でも先輩のような兄のような先生のような気持ち、

どっちにしても上から目線で見えていたと思う。

愛ちゃんは10歳ぐらいの知的能力しかなかったからだ。

愛ちゃんの僕に対する態度が、他のボランティアに対するそれとはなんとなく違う事に気付いたのは、通い始めて二週間ほどした頃だ

った。

愛ちゃんは日常生活にはさほど不自由はない。

計算も出来るし簡単な文章の読み書きも出来るから、作業所やお店の仕事もスムーズにこなした。

何よりもその人懐っこい性格で、お客さんには人気者だった。

とはいえ帳簿をつけたりは出来ないし、少し難しい計算や

（大勢で来たお客さんが、ひとりずつ支払いたいと言い出したり）トラブル対処は難しかったので、お店には必ず職員がボランティアがついていた。

いつもは数人いるボランティアがたまたま僕ひとりだったとき、愛ちゃんがいつの間にか僕にぴったりとくっついていた。

僕は腕に押し付けられたような形になった愛ちゃんの胸のふくらみにドキツとした。

愛ちゃんはそんな僕を試すような目をして、ちらつと見た、ように僕には思えた。

僕は慌てて少し離れた。

それから僕は愛ちゃんとできるだけ二人きりにならないように気をつけた。

みんなという時の愛ちゃんは、特に変わった様子はなく、僕の勘ぐりすぎかと考えてしまうほどだった。

でもやはり杞憂ではなかったのだ。

朝から土砂降りに近い雨だった。  
電車はのろのろ運転で、

いつもの倍近く時間がかかった。  
作業所までは駅からかなり歩く。

僕がびしょ濡れになって、ようやく辿り着くと、  
職員の梶山さんがモップで床を掃除していた。

梶山さんは僕の母親と同じぐらいの年の女性で、  
三人いる常勤の職員のひとりだ。

せつかく綺麗になった床を汚さないようにと  
僕はしつこいぐらいにマットで靴を拭いた。

「木場君は体調が悪くてお休みだって」

梶山さんが、僕にタオルを手渡しながら、言った。  
その目がちよつと笑っている。

同じ大学からボランティアに来ている木場は、  
やる気がないわけではないのだが、  
バリバリ働きます系ともいえない。

昨日もボランティア仲間でカラオケに行つて、  
人一倍楽しそうに歌っていた。

「雨かよ、だりいなあ」という、

彼の声が聞こえた気がした。

職員は、梶山さんの他に渡辺さんという男の人がいて、  
力仕事や大工仕事を一気に引き受けている。

と言っても、定年すぎて久しいという年齢だから、  
僕たちボランティアを何かとあてにしている。

あまり喋らないけれど、気難しいのではなく、

ずっと仕事人間やってきました！というタイプだ。  
木場はうっとおしがるが、僕は嫌いではない。

もうひとり香田さんという30代ぐらいの女の人だ。  
化粧気はなく、地味すぎる格好で、  
いつも疲れた感じなのに、それでも底力のようなものは  
感じさせる不思議なオトナだと僕は思っていた。

香田さんは、僕の通う大学の先輩らしく、  
僕たちは香田さんの紹介で、この作業所で働いている。  
大学ではボランティア活動が必修で、みんなどこかで  
働いている。

保育園や老人ホームが人気だが、  
僕は障害者支援センターを選んだ。  
年の離れた弟が障害を持っているからかもしれない。

大人の障害者とはほとんど触れあったことがなかったので、  
最初はかなり戸惑った。  
そろそろ半年が過ぎようとしている今でも、  
うまく接することが出来ているのか、  
自分でもよくわからない。

別棟でやっているパン作りで  
怪我人が出たらしい。

パンを切る機械で指を落としてしまったのだと、  
梶山さんがオロオロしていた。

救急車が来て職員が数人同乗していったので、  
梶山さんと渡辺さんが、作業所の方に  
応援に行くことになった。

代わりに予定より早い時間に、

愛ちゃんが喫茶の方にまわってきた。

事故を見て、動揺してしまったようで、こっちへ来た方がいいと判断されたのだ。

「今日はきつとお客さん来ないと思うから、大丈夫よね」

開店準備がほぼ整った時点で香田さんが言い出した。

警察にも行かなければいけなくなったらしい。

香田さんは、この作業所全体の責任者なのだ。

僕と愛ちゃんは、「ひまわり」の中で

二人っきりになってしまった。

午後になつて雨足は更に強くなつてきた。

いつもは日当たりのいい

「ひまわり」の中も薄暗く、

間接照明から蛍光灯に切り替えられていた。

事故を目撃してしまつた愛ちゃんは、

まだ興奮している様子で、

青い顔で小刻みに震えている。

病院へ付き添つた職員から連絡がきた。

緊急手術が行われ、

縫合には成功したのだが、

今日は入院することになつたので、

しばらく付き添わなくてはならないという。

僕の方に用がなければ、

時間を延長して欲しいという事だつた。

僕はためらいながらも了承ざるを得なかつた。

香田さんの予想通り、

大雨の中では、お客さんは誰も来なかつた。

「怪我しちゃつた大川さんの手術ね、

無事に終わったんだつて」

愛ちゃんは少しうるんだ目で

僕を見上げた。

「良かったね」

「うん」

自分自身を落ち着けるように、

小さく息を吐いて、



につこり笑った愛ちゃんが、  
今までに見たことがないくらい  
可愛かった。

僕は思わず愛ちゃんを抱きよせた。  
今日も綺麗に整えられた髪から、  
いい匂いがした。

その後の僕の行動は、  
魔がさしたとしか思えない。  
もしかしたら、

愛ちゃんが僕に魔法をかけたのかもしれない  
とさえ、思っている。  
それほど、

自分でも抑えきれない衝動が  
突然襲ってきたのだ。

僕はあるうことか、  
お店の入り口に鍵をかけた。  
蛍光灯を消すと、  
店は間接照明だけになった。  
愛ちゃんは僕の傍に寄り添い、  
僕の行動をじっと見ていた。  
僕は愛ちゃんと向き合った。

愛ちゃんは状況が理解しきれない様子で、  
少し首を傾げて僕を見た。  
僕の目が怖かったのかもしれない。  
少しおびえたように、  
顔をこわばらせた。  
僕は今度は少し強引に、

愛ちゃんをぎゅっと抱きしめた。  
愛ちゃんはびくつとして、  
身を堅くした。

もしこのまま愛ちゃんが、  
拒否し続けてくれたら、  
たぶん僕は気持ちを、  
こみあげてくる衝動を  
抑えられた気がする。  
でも愛ちゃんは違った。  
愛ちゃんの身体から、  
ずっと力が抜けていったのだ。

#### 4（前書き）

少しオトナな表現があります。  
ブンガクの範疇だと認識していますが、  
嫌な人はスルーしてくださいね。

愛ちゃんは目を閉じて、顔を少し上に向けた。  
僕は少しだけ、ほんの少しだけ迷った。

愛ちゃんに対して

好意以上の気持ちを持っていたかと問われたら、  
うなづくことはできない。

そこにあつたのは、愛情ではなく、  
性的興奮にすぎない事は、  
自分が一番分かっていた。

僕は呼吸を整えながら、

愛ちゃんをしっかりと抱き寄せた。

愛ちゃんは、されるがままに、

僕にピッタリとくっつく。

その顔はほんの子どものもようでも、  
成熟した女のもようでもあつて、  
僕の理性を失わせた。

僕は、愛ちゃんの淡いピンク色の唇に、

そつと自分の唇を重ねた。

愛ちゃんはいつの間にか目をつぶっている。

しっかりと結ばれていた唇は、

僕が舌先で軽くつつくと、

すつと受け入れてくれた。

それがあまりに自然だったので、

僕は少し驚いた。

初めてじゃないのかもしれない、

そう思ったのだ。

僕たちは唇を重ねたまま、  
客席の長椅子にどさっと倒れこんだ。

しばらく僕と愛ちゃんは、

お互いの体温に、

ただ、戸惑っていた気がする。

愛ちゃんは、目をつぶったまま、

僕の次の行動を待っていた。

と、僕は勝手に解釈した。

僕は本当にすぐ迷いながらも、

愛ちゃんの膝に手を伸ばした。

薄いブルーのフレアースカートは、

まるで僕の指を誘うように、

少し揺らめいた、そんな気がした。

僕の指はゆっくりと愛ちゃんの柔らかな太ももを

這い、僕の意志を無視するかのように、

いや、僕の意志どおりに、

愛ちゃんの核心に辿り着く。

愛ちゃんはずっと目を閉じたまま、

少しだけぴくりと身体をよじらせた。

わたしは、恋をします。

男の人と、恋をします。

恋人です。

恋人は、かつこよくて、せが高いです。

わたしのことを、

愛ちゃんとよんでくれて、

うれしいです。

なぜかというと、

おとうさんみたいだからです。

おとうさんは死んでしまったからです。

でも恋人は、

おとうさんみたいではないです。

おとうさんよりも

若いです。

かつこよくて、せが高いです。

恋は楽しいです。

なぜかというと、

わくわくするからです。

恋人と会つと、ドキドキします。

なぜドキドキするかというと、

とても大好きだからです。

好きな時には、

いっぱい会いたくなります。

毎日ずっと会いたくなります。

恋は、悲しいです。

なぜかというと、  
会えないと、さびしいからです。  
わたしは、さびしいはきらいです。  
だから悲しいです。

恋はあつたかいです。  
なぜかというと、手をつなぐからです。  
それからぎゅっとされるからです。  
ぎゅっとされると、  
なきたくなります。  
うれしいのになきたくなるのは、  
ふしぎです。

恋はなみだが出ます。  
バイバイする時は、  
いつもなみだが出ます。  
なかなかでねって、  
頭をなでてくれます。  
だからうれしいです。

愛ちゃんのお母さんが差し出したノートには、  
丁寧な字が並んでいました。  
文章には、たどたどしさがあるものの、  
漢字もたくさん使われていて、  
愛ちゃんが一生懸命に書き綴る様子が  
目に浮かぶようでした。  
赤い表紙には、  
「恋うた」と書かれていました。

愛ちゃんの体調がおかしい事に  
私が気付いたのは、夏の終りの頃でした。  
こういう仕事に携わって、  
かれこれ10年程になりますが、  
決して珍しい事ではないのです。  
病院では、

妊娠4ヶ月目に入っただろうと  
診断されました。

体調管理の一環としても、  
女性の生理日は、

だいたい把握しているつもりでしたが、  
愛ちゃんの場合は不順気味だったのと、  
処理が自分できちんと出来るので、  
注意が足らなかつたと反省しています。

妊娠週数が進んでいるということで、  
犯人さがしは先送りにして、  
愛ちゃんのお母さんに連絡をし、  
来てもらう事になりました。  
驚いてかけつけたお母さんは、  
ご主人を亡くされてから、  
九州にある実家に帰っていて、  
体調を崩されていたこともあって、  
愛ちゃんに会うのは、  
数か月ぶりだったそうです。

お母さんはハンカチで目頭を押さえながら、  
私にノートを渡し、  
それからまっすぐに私の顔を見ました。  
「産むというわけには、



いかないもんでしょうか？」

私は言葉に詰まってしまいました。

「私が一緒に育てますから」

お母さんは、決意のこもった目で、訴えかけてきました。

もちろん私も愛ちゃんと話をしました。

事の因果関係についても、

かみくだいて説明しました。

愛ちゃんは私が思っていたよりもずっと、よく分っていました。

決してされるがままであったがゆえの結果ではなかったのです。

もつと驚いたのは、

お腹の中に赤ちゃんがいるという事に、

愛ちゃんが気付いていたことです。

まだ胎動がある時期ではないと思うので、本能的なものなのでしょうか。

その時、愛ちゃんは

「赤ちゃんを産みたい」と言って泣きだしました。

きつとお母さんと話した時にも、そういう展開になったのでしょうか。

出来ることなら産ませてあげたいと私だっと思っています。

愛ちゃんとはまだ1年とちょっとの付き合いでも、作業所やホームで生活を共にし、

母親のような気持ちも抱いていました。

ここに確かに在る命を  
切り捨てる権利は、  
誰にもないと思います。  
育まれた命が絶対に不幸せになるなどと  
断定もできません。

本人と相手呼び、  
親と職員とで、  
じっくりと時間をかけて  
話し合うべきことなのです。

でも愛ちゃんは、  
どうしても相手の名前を言わないのです。  
たぶん、口止めをされているのでしょう。  
そこでお母さんが、  
ノートを持ってきたというわけです。

でも残念ながらノートには、  
相手に結び付く記述は  
見当たりませんでした。  
お母さんの涙と決意に、  
私が戸惑っていたちようどその時に、  
ドアがノックされました。

職員の梶山さんでした。  
「香田さんに、どうしても今、  
話したいことがあるっていうの」  
梶山さんの後ろには、  
ボランティアの青年が立っていました。

青い顔をして、

目を伏せています。

「ここで？」

私は青年に聞きました。

青年はうつむいたまま黙っています。

梶山さんが青年の背中をぽんと叩いて

促すと、青年はよろよろと前に出ました。

それから顔をあげ、

応接室の中にちらつと目をやりました。

それから唇をぎゅつと噛みしめ、

うるんだような目で私を見て、

小さくうなづきました。

私は愛ちゃんのお母さんと思わず顔を見合わせました。

その青年、中野大輔君は私の大学の後輩で、  
去年の秋ごろから、

ボランティアとして働いてくれています。

細身で色白で、ナイーブな印象ですが、

誰とでも真摯に対峙する、

今時珍しいしっかりした青年だねと

職員の間では高く評価されていました。

促されるままに私の隣に腰をおろした中野君は、  
黙ってうなだれていました。

「話してちょうだい」

私はなるべく穏やかに言いました。

「…僕…僕はその…」

絞り出すような声は、震えています。

「愛ちゃんのことだよね」

中野君は深くうなづきました。

短く切られた髪は黒々としています。

昨日はもう少し長くて、

確か少し茶色がかっていたはずで

きつと染め直してきたのでしょう。

「…どうしたら…いいんでしょうか？」

中野君は、困り果てた目で、

おそろおそろ私を見上げて、

それから愛ちゃんのお母さんに目をやりました。

愛ちゃんのお母さんは、中野君の顔を

じっとみつめました。

「あなたが愛子の？」

中野君は少しだけ首をかしげて、  
吐息をもらしました。

「本当は、よくわからないんです」

私と愛ちゃんのお母さんは、また顔を見合えました。

「一度だけなんです…それに」

「それに？」

言葉に詰まった中野君に、私は少し焦れてきました。

「…その…最後まで…あの…いかなかったと  
思うんです」

途切れ途切れに中野君は、その日の様子を話してくれました。  
7月の始めごろ、作業中に入所者が指を切断してしまう  
事故があった日のことです。

あの日は、作業所開設以来初めての大きな事故で、  
職員が皆、あたふたしていました。

土砂降りの中、私は警察に出向いていました。

記憶がはつきりしませんが、

中野君の話によるとその間、

彼は愛ちゃんと喫茶に二人きりにな  
ったようなのです。

そこで、そういう事になってしまったと、  
いうことでした。

彼が嘘をついているようには思えませんでした。

彼の言うことが本当だとすれば、

万が一、行為がなされていたと仮定しても、  
月数が合いません。

愛ちゃんが恋うたを綴るほどに  
好きでたまらない「恋人」は、

中野君ではないと思われました。  
でも、私は中野君にも猛省を促さなくては  
思いました。

「責任取れる？」

私は心の中を見透かされないように気をつけながら、  
冷静な口調で、中野君に問いかけました。

中野君は、またうつむいてしまいました。

自分ではないと思いながらも、

もしかしたらという気持ちもあつて、

この場に來たのでしょうか。

まだ20歳の大学生が、

私がつきつけた「責任」という言葉の重みに、  
たじろぐのも無理はありませんでした。

時計の音だけが大きく響いていました。

「愛ちゃんと、話がしたいんです」

少し落ち着いたのか、決心をしたのか、

中野君は、また私に目を向けました。

「愛ちゃんはね……」

私の言葉を愛ちゃんのお母さんが遮りました。

「愛子は誰にも会いたくないって言ってるんだけど」

お母さんは、中野君の顔をじつと見て、

少し微笑みました。

「あなたの事、話してみるわね」

明日もう一度話をする約束をして、

中野君を帰しました。

何度も頭を下げながら部屋を後にする中野君に、  
私は10年前に別れたある人を重ねていました。

その人は30を少し過ぎた、ごく普通の営業マンでした。

出会ったのは私がまだ10代の頃。

大学に入る為に上京してきたばかりの

何も知らない田舎者だった私には、

彼の大人びたスタイルや言動が、

眩しいばかりでした。

そんな私を彼は本当はどう思っていたのか、  
今となっては、

ただの目新しいおもちゃだったのだと  
感じています。

彼に妻子がいるとわかった時、

あまりの衝撃に泣きじゃくる私を、

彼はただ黙って抱きしめました。

そして私の頭を撫ぜながら言ったのです。

「ごめんね」

世の中にこんなに残酷な「ごめんね」が

あるということを、

その時に初めて知りました。

たぶん中野君も愛ちゃんに同じ台詞を言うのではないか、

私はそう思いました。

愛ちゃんはその「ごめんね」が

きつと直観的にわかると思うのです。

やっぱりもう会わせてはいけない…

でも、愛ちゃんのお母さんの意見は違ったのです。





夢か現かはつきりしない世界の中で、  
ドアチャイムがしつこく鳴っている。  
鳴っているからなんなんだ！

俺は現実をシャットダウンして、  
眠りの世界に戻ろうとした。

「もう！健ちゃん！」

隣に寝ていた里美が起き上がった、気がした。

「ひまわり作業所の香田さんだつて」

里美が、俺の身体をバシバシ叩く。

「えっ？」

肌を感じる痛みと「香田さん」という名前に、

俺の意識は、一気に覚醒した。

里美は眠そうに目を擦りながら、ベッドに倒れ込む。

「こんな時間にうざくね？」

ベッドの上でバタバタしながらうめく里美を見て、

俺の頭はフル回転を始めた。

お前、そんな格好で出たのかよ！

ベッドの脇に置かれたデジタル時計は、

今、8時30分に切り替わったばかりだ。

休みの日のこんな時間に、確かにうざい、

うざいけど…なんで？

香田女史がうちを訪ねてくるなんて、

今まで一度もなかったことだ。

俺は慌ててシャツをはおり、

ジャージのズボンを穿いた。

里美がケラケラ笑いながら、

ベッドの中にあつた俺のパンツを投げる。

「うつせーよ！寝てろ」

俺はパンツを拾って里美の顔めがけて投げかえした。

「おとりこみ中だったかしら？」

ドアを開けると香田女史が醒めた目を向けた。

この人は、いつもこうババくさい言葉を使う。

ひつつめた髪と今時見かけるのも珍しい瓶底眼鏡のせいで、  
年よりかなり老けて見えた。

里美が読んでいる少女漫画じゃないが、

コンタクトにしてちゃんと化粧をすれば、

結構見られる顔なのにもつたいない。

どっちにしても俺はこの手の女は苦手だ。

まあ、女と意識した事もないけどね。

「何か？」

俺はシャツの襟を整えながら営業用の声を出す。

香田さんはちらつと部屋の中に目をやった。

「ちよつと出られないかしら？」

出たくはないが、出られなくはない。

「いいつすよ。支度してきます」

俺は慌てて奥へ入った。

案の定、里美ガツチリ不機嫌な顔で待っていた。  
とりあえず無視して着替える。

パンツも忘れずに…？パンツ、パンツ…里美がまた放り投げた。

「ノーパン男！朝から不倫男！さっさと消えろ」

布団をかぶって丸まった里美が可愛くなった。

「ごめんな。すぐ帰るからさ」

返事はない。

「里美ちゃあん？」

思い切り布団をまくりあげ、俺は里美を抱きしめた。  
俺が本当に愛しているのはお前だけだ。

駅前の喫茶店は微妙に混んでいた。

俺たちは二人掛けの席に通され、

香田さんがコーヒーを二つ…俺に断る事もなく注文した。

お茶を楽しむ為に来たのではなく、

あくまでテーブルチャージだという意味だから…。

最初はイチイチーム力ついていた香田女史の行動も、

その意味合いが読めるようになってくると

納得出来たりする。

なんか俺も大人になったよなあと、つくづく思う瞬間だ。

「こういう言い方は、本当はしたくないんだけど」

気づまりな長い沈黙の後、コーヒーを一口飲んでから、

香田女史が口を開いた。

「は？」俺には何の話なのか、まじで見当もつかない。

俺はそんな気持ち顔を顔に出していたのだろう。

香田女史は嫌な顔をした。

「ちょっと噂を聞いたの…木場君がその…」そこまで言って口ごもる。

「はつきり言ってください」俺はイライラして少し声を荒げた。

香田女史はため息を漏らして俺の顔をしみじみと見る。

瓶底の目はどんな色をたたえているのかよくわからない。

香田女史が途切れ途切れに話した内容は俺にとって身に覚えのないことばかりだった。

つまりは作業所の愛ちゃんが妊娠し、その犯人だと疑われているのだった。

愛ちゃんは確かに作業所のアイドルだが…

それはあくまでマスコットの的なものであって、

香田女史と同じく女と見た事はない。

そう言われてみれば、時々誘うような仕草をする事もあった気がするが、

俺からすれば特に気になる事はなかった。

俺ぐらい女に免疫があれば、ちょっとぐらいでは動じない。

こついう場合、純情な奴…例えば中野のようなタイプ…の方が始末が悪いのだ。

携帯電話が鳴った。里美からだ。

俺は少し躊躇したが、なりやまないので仕方なく出た。

開口一番、ダミ声だ。

これはかなり怒っている。

出身は九州の熊本だ。

地元の高校を出て、東京に出たい一心で今の大学に入った。

正直言つて、福祉に興味があつたわけじゃない。

経済的に浪人は出来ないから、

受かつた学校に行くしかなくて、

滑り止めの滑り止めに、入学したに過ぎない。

とはいえ、入学後に大好きな婆ちゃんが寝たきりになったりがあつて、

今では介護の資格を取るのもいいかなあと思い始めている。

根っからの勤勉家つてわけではないが、

勉強は嫌いでもない。

情報処理の専門学校に通う同い年の里美とは、合コンで出会つた。

その日のうちにホテルに行つて、

やることはやつたから、それまでの女かと思つたら、

なんとなくうまがあうというか、もう一年になる。

頭の出来はイマイチだけど、顔は可愛い。

甘えん坊で我がままだけど、根は優しい。

一緒にいると癒される、まあ、そんな感じだ。

授業にバイト、ここ数か月はボランティアに出る回数も増えて、驚異的な忙しさだつた。

家に帰って爆睡するばかりの日々に、

里美はぶつぶつ文句を言いながらも、

よく洗濯や掃除をしに来てくれていた。

昨日は久しぶりにバイトが休みだつたから、

映画を観て、居酒屋で食事をしながら軽く飲んで、ふたりで俺のアパートに帰ってきた。

それからは良く覚えていないが、たぶん何回戦かやって、疲れて寝てしまったんだと思う。

里美とは身体の相性もバツチりだから、

こんな事はよくあることだ。

香田女史がやってきたのは、そんな朝だから、

いつものように余韻を楽しみたかった里美が

怒るのも無理はない。

と思って電話に出たが、どうやら違うらしい。

今度はうちに中野がやって来たという。

「何？このキモ男」

って、おいおい、本人を前にそれはまずいだろう。

まったく正直だなあ。

俺の困った顔を見て、香田女史が小首を傾げた。

「中野君が来たみたいですよ」

「えっ？」

いつも能面のように表情の乏しい香田女史の顔色が変わった。

## 8（後書き）

ここまで読んでいただいた皆様、ありがとうございます。  
主人公（視線）が変わりながら、進行していきませんが、  
読みにくくはないでしょうか？

この先、あと3人ぐらいの登場があります。  
ご意見、ご感想をお待ちしています！

木場の家には、彼女と思われる女の子が居て、

下着かと見間違っような格好のまま、玄関先に出てきた。

僕を訝しげな顔で上から下まで眺めた後、

おもむろに携帯を取り出した。

木場につながったのだろう、彼女の口から出た言葉は、

「なんかキモイのが来てるんだけど」だった。

本人を目の前にして、それは暴言としかいえない。

彼女はおかまいなしで機嫌の悪い声で話し続け、

「すぐに帰ってくるって」と言い放ち、

ボタンとドアを閉めた。

僕が木場を訪ねたのは、少し前に

彼と交した会話を思い出したからだ。

「付き合ってる彼女がいたとしてな」

作業所からの帰り道、木場は電車の中で突然に切り出した。

夕方の車内は、まだそれほど混み合ってもいなくて、

僕たちは並んで座っていた。

ああ、また自慢話が始まったかと思いつながらも、

僕は黙って耳を傾けた。

「例えば、まだ付き合って半年とかってレベルなのにな」

木場の表情はいつもより少しだけ真剣だった。

「妊娠したって言われたら、どうする？」

「えっ？」

「例えばの話だよ」

こんな僕にだって付き合っていた女の子がいたこともあるし、  
豊富とはいえないまでも、そういう経験は  
なんどかある。



でも、だから男はずるいんだと言われそうだけど、ちゃんと避妊をすれば大丈夫だと確信していた。妊娠の事なんか考えたこともなかったのだ。

「それって…避妊してなかったってこと？」

「知らねえよ」

木場は吐き捨てるように言った。

例えばの世界を話すのは、難しい。

「出来ちゃったら、産むかおろすしかないと思う」

僕は言葉を繋げた。

木場は眉間に皺を寄せて僕をにらむように見た。

「んなこと、わかってるよ」

会話はここで終わった。僕に何を聞いても無駄だと思

ったのだろう。それっきり木場は下を向いて、

眠ったふりをしていた。

僕はどう答えたらよかったのかと、ひとりで悶々とした。

「逃げちゃえよ」

かな？とも考えたけれど、学生的身でどこに逃げるといっ

かな？とも思ってたが、DNA検査したら、

すぐに判明してしまうだろう。

「僕なら」

僕は口を開いた。木場は鬱陶しそうに顔を上げ、僕を見た。

「僕なら…謝る…かな」

「はあ？」

木場が心から馬鹿にしたような声をあげた。

「あのな、世の中にはごめんなさいですまねえ事が

いっぱいあんだよ」

「でも、今の状態で結婚して親父になるのが無理なら、謝るしかないよ」

相手にならないというような表情を浮かべたまま、  
木場は次の駅で降りた。

その時は、人に聞いておいて、そういう態度をとった事に  
腹がたっただけだったが、

愛ちゃんの話聞いて、もしかして思った。

もしかして思いたかったから、強引に思い出したのかも  
しれない。

それからずっと僕の頭の中では、

「逃げちゃえよ」「俺じゃねえよ」という

声がこだましている。

同時に「自分がやった事に向き合えよ」「お前だよ」という  
声も聞こえる。

だから僕は、真実を見つけないならなかった。

たどり着いた先が、どうであろうとも。

外階段の下で待っていると、

それほど時間をおかずに、木場が息を切らして戻ってきた。

苦しそうに身を屈めて息を整えてから、

顔をあげる。

「一緒に来いよ」

香田さんと喫茶店にいたのだという。

なんで香田さんが木場のところに？

僕は香田さんの分厚いメガネの下から浴びせてくる  
視線を思い出して、身震いをした。



喫茶店までの5分ほどの道を、黙って歩いた。

僕はどう切り出したら良いのかわからず、

かといって、このまま香田さんと3人で話すのもためらわれた。

「ちよつと」

前を歩いていた木場が面倒くさそうに振り返った。

「先に話したい事があるんだけど」

木場はその場で足を止めて僕に向き合った。

「愛ちゃんの事だろう？」

やっぱり香田さんもその事で木場を訪ねたのか。

「俺は関係ねえから」

木場は動揺する様子もなく、いつもの調子で吐き捨てるように言った。

「この前さ、電車の中で…」

「あれは友達の話だって言っただじやねえかよ」

初めて聞いたが、僕はそれ以上何も言えなくなった。

木場はまたくるりと向きを変え、歩き出した。

仕方なく僕もついていく。

「お前なんじゃねえの？」

僕は慌てて木場の隣にまわる。

「なんで…」

声がひっくり返りそうになった。

香田さんがそんな事を言ったのだろうか？

「なんてな」

木場は表情ひとつ変えずに、足を速めた。

「お前なんじゃねえの？」は、僕が用意していた言葉だった。

木場なら、充分にありそうだから？

木場なら、こんな事態も軽くかわせそうだから？  
自問自答してみても、答えは出ない。

木場と愛ちゃんが親しく話しているのを、僕は何度か見たことがある。

愛ちゃんが木場の冗談に大きな声でケラケラ笑い、  
ぴったりと身を寄せて、内緒話をしていた事もあった。

あんな事があってからなんとなく愛ちゃんを避けていた僕は、  
何も感じないフリをしながらも、

不思議な事に嫉妬のような感情を抱いていたのかもしれない。  
自分に惚れているはずの愛ちゃんが、

木場に対してもそういう行動をとることが  
許せなかったのかもしれない。

どっちにしても、勝手な感情であることは自覚していた。  
例えば愛ちゃんときちんと付き合って結婚してなどという、  
ルールはまったく持っていないかったのだから。

喫茶店の前で、木場は僕をちらつと見た。

情けないことに僕は泣き出しそうな顔をしていたのだと思う。

木場はふつと優しい笑みを浮かべて、

「大丈夫か？」と小さく訊ねた。

本当は逃げ出したかった。

香田さんとは愛ちゃんのお母さんも交えて、昨日話したばかりだ。

あの時の僕の曖昧な態度から、木場を訪ねた理由はすで  
にお見通しなはずだ。

木場と一緒に香田さんと話しをするというのは、

今の僕には拷問に近かった。

木場は僕の背中をすつと押して、僕を店の中に入れた。

店は割と空いていて、奥の4人掛けにひとりで座っている香田さん

が、

すぐに目に入った。

遠くからでもその目が、すべて分かっているよと言っているような気がして足がすくんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5275d/>

---

恋うた

2010年10月8日11時59分発行